

ブレンディッドラーニングを導入した日本語授業 —メディアセンターの支援によるシステム構築事例—

立教大学 異文化コミュニケーション学部教授 池田 伸子

1. システム構築に至る背景

近年の国際化の流れを受け、本学で学ぶ短期留学生数も増加を続けている。また、「大学間交流」以外に、様々な学部が学部間で海外の大学と協定を結ぶことが増えてきたにより、本学で学ぶ留学生の日本語能力や日本語学習に対するニーズが多様化してきている。

このような状況に対応し、効果的な日本語教育カリキュラムを展開するためには、学習者のニーズに合う様々なコースを展開し、それを学習者に提供する必要がある。しかし、大学で展開できるコースの数や授業時間数には限界があり、なかなか十分な教育を学習者に提供できないという現実がある。

展開できる授業時間に限界がある中で、できる限り学習者の日本語学習を促進するためには、個々の学習者が授業時間外に日本語を学べる機会を提供する必要がある。そこで、紙媒体の宿題を学生に課したり、CD-Rom 媒体で学習者が学習するスタンドアローン型の CALL 教材を学生に配布するなど、これまで様々な工夫を実践してきた。しかし、紙媒体の宿題の場合には、学生が問題に答えてからフィードバックを得るまでの時間が長いため、学生は宿題を提出してしまうと、自分の学習を改めて振り返るという作業に向かわないという問題が生じ、また、スタンドアローン型の CD-Rom 教材では、学習者がきちんとそれを使って学習したかどうかのチェックができないという問題が生じてしまった。それを受けて、2004 年から 2005 年までは、授業に組み込んだ形で授業時間内にコンピュータ教室で CD-Rom 教材を使った学習をさせるという方法をとったが、これでは授業時間外の学習を促進することにはならず、また、欠席した学生は学習の機会を失ってしまうため、そのような形式での運用はあきらめざるを得なかった。

そこで、学生がいつでも、どこにいても日本語が学習できるようなシステムを構築することを思い立ち、最初は初級用教材システムを開発、現在は中級用のシステムを開発し、実際に運用を行っている。

2. 本学の日本語プログラムにおけるブレンディッドラーニング

学生が「いつでも、どこでも」学習できる環境というと、eラーニングを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。確かに、高等教育機関においても eラーニングの導入は進んでおり、その効果についての研究も数多く行われ、対面型の授業の予習や復習として eラーニングを利用することの効果等が実証されている(森田 2002、吉田 2003)。しかし、1学期あるいは1年を通じた教育プログラムという視点で見たとき、多くの eラーニングプログラムは失敗に終わっているように思える。ドロップアウト率が高いからである。「い

つでも、どこでも」という e ラーニングの利点が、「参加しない」ことを簡単にしているのだ。

そこで、学生を途中でドロップアウトさせることなく、e ラーニングを活用するために、近年注目が集まっているのが「ブレンディッドラーニング」である。その定義は研究者によって様々ではあるが、現在では、「伝統的な教室での対面授業と e ラーニングを融合させた学習」と定義されることが多くなっている (Miller et al. 2004, Ginns and Ellis 2007)。そして、この定義における e ラーニングとは、非同期分散型の自学自習コンテンツによる学習、オンラインで提供される小テストの受験などの情報技術を活用したバーチャル空間における学習を指している (安達 2007)。

そこで、本学における日本語プログラムでは、学生のドロップアウトを防ぐため、e ラーニングを「非同期の自学自習文法ドリル、語彙ドリルを利用した学習」に用い、「このような e ラーニングの授業時間外の利用と従来の対面授業を組み合わせた学習環境」、つまりブレンディッドラーニングを導入している。このようなブレンディッドラーニングの形態は、個々の学習者に授業時間外に e ラーニングを利用した予習や復習を行うことが可能な学習環境を提供できるため、学習の効果・効率を高めることにつながる (安達 2007) と考えたからである。

3. 初級、中級プログラムにおける導入事例

3. 1 初級プログラムにおけるブレンディッドラーニング

初級プログラムでは、e ラーニングを用いた文法学習、語彙学習を対面授業に組み込む形でブレンディッドラーニングを実施している。学生には、授業で学んだ文型や新出語彙を e ラーニング教材で復習することを課しており、その実施状況は最終成績に一定割合で組み込まれている。

3. 2 中級プログラムにおけるブレンディッドラーニング

中級プログラムは、新座で展開している「日本語中級」科目の履修者を対象に開発したものである。「日本語中級」は、レベルの異なる学生が1つのクラスで学ぶという特殊な科目であるため、「個々の学生のレベルに合った文型、文法、及び語彙は e ラーニング学習」、「教室では、個々の学生が自分のレベルの日本語を用いてディスカッション等の口頭表現を実施する」という「ブレンド」を取り入れたブレンディッドラーニングを導入している。そのため、学生の e ラーニング教材への入り口は「日本語中級」という同一のものだが、学生個別の ID とパスワードによって、表示される教材のレベルが違うという構造になっている。そうすることで、学生は、他の学生と異なる教材を履修しているという意識なしに、自分に適したレベルの教材を学習できることになる。また、学生が間違っ異なるレベルの教材を使ってしまうリスクも回避できている。



図1 教材サイト画面



図2 学生ログイン画面

4. 効果

初級プログラムにおけるブレンディッドラーニングは、学生の日本語能力を向上させるために有用であるという結果が出ている（池田 2010）。具体的には、①最終成績は、eラーニング教材を利用した頻度からの影響があること。②毎週実施される文法クイズや語彙クイズの成績は、eラーニング教材の利用頻度の合計ではなく、教師が提示した締め切り前にeラーニング教材を利用した頻度からの影響があることが明らかになっており、対面授業時間外のオンライン教材へのアクセスが、初級日本語学習においてブレンディッドラーニングは有効であると言える。

中級プログラムにおいては、現在試行中であるため、その効果はまだ実証できていないが、その効果が実証されれば、異なるレベルの学生を1つのクラスで教えるという新しい日本語科目の可能性が示せると思っている。

5. メディアセンターによる支援

展開できるクラス数に制限がある状況の中で、より効率的なプログラムを開発するために、筆者はこれまでもさまざまな形で新しいメディアの活用を試みてきた。その過程において、新しいメディアの提供やシステム開発にあたってのアドバイス等、メディアセンターのサポートは欠かせないものであった。

今回のeラーニング教材の開発においても、最初は自分の研究室にサーバを置いて開発、運営を行っていたが、メディアセンターがホスティングサービスを開始してくれたおかげで、開発環境、運用環境ともに著しく向上した。具体的には、スピードが速くなったこと、電源管理の心配がなくなったこと、セキュリティ上の不安がなくなったことなどである。

情報機器が教育現場に普及し、それらを教育現場で活用することが求められる今、教員が質の高い教育プログラムを開発し、運用していくためには、メディアセンターのサービスは必要不可欠なものである。今後も、さらに、本学の教育支援のために、有用なサービスを提供していただけることを、強くお願いすると同時に、これまでの支援に感謝の意を

表したいと思う。

引用文献

- Ginns, P. and Ellis, R. (2007) Quality in blended learning: Exploring the relationships between on-line and face-to-face teaching and learning. *The Internet and Higher Education*, 10 (1), pp.53-64
- Miller, C., Jones, P., Packham, G. and Thomas, B. (2004) A viable solution: the case for Blended Delivery on an On-line Learning Programme, *Networked Learning 4th International Conference, Lancaster University, 5th-7th April*, pp.497-511
- 安達一寿 (2007) 「ブレンディッドラーニングでの学習活動の類型化に関する分析」、『日本教育工学会論文誌』、30 (1), pp.29-40
- 池田 伸子、「ブレンディッドラーニング環境における e ラーニングシステム利用の効果に関する研究：立教大学初級日本語コースを事例として」、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要『ことば・文化・コミュニケーション』2号、pp.1-12,2010年5月
- 森田正康 (2002) 『e ラーニングの<常識>誰でもどこでもチャンスをつかめる新しい教育のかたち』、朝日新聞社
- 吉田文 (2003) 『アメリカ高等教育における e ラーニング 日本への教訓』、東京電機大学出版局